



多くの俗っぽい人物がそうであるように、有力者、適切で重要な人物というものは、部屋に入ってきた瞬間にそれとわかるものだと私はずっと教え込まれ、信じ込んでいました。即座に存在を感じることができる。そのような考えでいましたから、私も部屋に入るときには印象深くあろうと躍起になっていました。尊大で、騒々しく、鼻持ちならず、中身のない口先だけ。私はいつもわきの人物の入場のようにトランペットを高らかに鳴らして登場するように務めていたのです。自分は考慮されるべき人間でなければならなかったのです。

ダーマの静かで、目に見えない存在の平和に満ちたあり様はまったくそれとは正反対でした。部屋に入ってきたことがほとんどわからない、あまりにも存在感がなく、足跡は極わずかで、その息は鳥の息づかいのようにほとんど感じることはできませんでした。重々しさとは真逆のものがありました。透き通っていました。ダーマの存在についての私の最初の証言は、正に透明の信仰告白と言えます。主張していても主張にはならず、個性というものがあまりない、芸のない人、そのような人物に見えました。ホメロスの忠実なペネロペのように、静かに片隅で働き、時間をかけて、自らの工ゴの多くの層を剥ぎ取ることに40年を費やした人、だからこそありのままで立つことができ、熱のない光を放ちつつ、光り輝き、自らの内にはまさしく神のみが通り抜けた扉があるだけ。そんな人物がそこにいました。これが私が目にしたものでした。

ダーマの心、ダーマの体には神を経験することを妨げるものは何もないように思えました。ダーマが彼の小さな種を預けるために私の心を震わせたとき、このいずれもが心臓が押し開けられたみたいだと言ってもまだ全然言い足りないでしょう。これらは言葉に過ぎず、また幻にほかなりません。だからこんなふうに言うこともできるかもしれません。ダーマがあなたの目と耳と心をほんの1分間捕らえたら起こること、稀にしか起こらないようなことが起こるのだと。

これは私に起こったことです。時の扉が開かれていました、そして私は入ったのです。その扉があなたにも開かれたままでありますように。急いで！老いた時の神は飛ぶのを休みはしない。

*Jorge Rueda Landeros*